

渋沢栄一略年表

西暦	年齢	主な出来事	備考
1840	0	天保11年2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村(現深谷市)の農家に市郎右衛門、えいの子として生まれる	アヘン戦争
1858	18	尾高惇忠の妹、千代と結婚	日米修好通商条約締結
1863	23	高崎城乗取り、横浜外国商館焼き討ちを計画するが、尾高長七郎(惇忠の弟)の説得により中止し、京へのぼる	世界初の地下鉄開通
1864	24	一橋家の御用人平岡四郎のはからいで渋沢喜作とともに一橋家に仕官する	
1867	27	將軍徳川慶喜の弟の昭武に従いフランスのパリ万博に随行	大政奉還
1868	28	フランスより帰国。一時静岡藩に仕え、商法会所を設立	明治に改元
1869	29	明治政府に仕官。租税正となる。その後、改正掛長を兼務	版籍奉還
1870	30	官営富岡製糸場設置主任となる	
1873	33	大蔵省の大蔵大丞(現在の事務次官に相当)を辞任第一国立銀行総監役となる	地租改正
1874	34	養育院の事務をつかさどる	台湾出兵
1882	42	妻千代死去	日本銀行開業
1883	43	伊藤兼子を妻に迎える	
1885	45	東京府の経営廃止条例の決定により、養育院の存続に努力する	伊藤博文初代内閣総理大臣
1888	48	上敷免村(現深谷市)に日本煉瓦製造会社の工場設立	
1900	60	男爵を授けられる	
1901	61	日本女子大学校開校。会計監督となる	
1902	62	アメリカ及びヨーロッパ諸国を兼子夫人と共に訪問し、国際親善につとめる	日英同盟
1909	69	実業家から引退し、社会福祉事業に尽力する	
1914	74	中日実業株式会社の創立を機に中国を視察し、親善につとめる	第一次世界大戦
1916	76	実業家から引退し、社会福祉事業に尽力する	
1920	80	子爵を授けられる	国際連盟成立
1921	81	ワシントン軍縮会議の視察をかねて渡米し、平和外交を促進する	
1923	83	関東大震災が起こり、大震災善後会副会長となり復興に尽力する	
1927	87	日本国際児童親善会長として、日米の人形の交流につとめる	日本初の地下鉄開通
1929	89	宮中に参内、単独御陪食の光栄に浴する	世界大恐慌
1931	91	11月11日永眠	満州事変
2021		渋沢栄一を主人公とする大河ドラマ「青天を衝け」が放送される	
2024		渋沢栄一が肖像の一万円札が発行される	



渋沢栄一記念館 埼玉県深谷市下手計1204
TEL.048-587-1100

※見学予約、休館日等については、HPで最新情報をご確認ください。
深谷市公式HP「渋沢栄一デジタルミュージアム」



2025.2



深谷市

渋沢栄一記念館

平成7年11月11日(渋沢栄一の祥月命日)に開館した、
埼玉県深谷市の運営する渋沢栄一を顕彰する記念館です。

館内のご案内

渋沢栄一資料室

写真や遺墨などの資料を通して渋沢栄一の生涯を紹介する常設展示と、収蔵資料などから渋沢栄一の様々な一面を深掘りする企画展示のコーナーがあります。

渋沢栄一アンドロイド

深谷市出身の鳥羽博道氏(株式会社ドートルコーヒー名誉会長)の寄付をもとに、石黒浩教授(大阪大学大学院)の技術指導により製作されました。アンドロイドの語る言葉を通して、在りし日の渋沢栄一の考えを今に伝えます。

講義室

70歳代の姿を忠実に再現した渋沢栄一アンドロイドから、「道德経済合一説」などの講義を受けることができます。

近代日本経済の父

渋沢栄一

Shibusawa Eiichi



渋沢栄一 一万円の肖像

Shibusawa Eiichi



渋沢栄一(雅号「青淵」)は、天保11年(1840)現在の深谷市血洗島の農家に生まれました。家業の手伝いを通じて父親の市郎右衛門から勤勉さ、人への思いやりを学び、母親えいから慈悲深い心や愛情をいっぱいを受けて育ちました。

また、従兄の尾高惇忠(雅号「藍香」)から「論語」をはじめとした学問を学ぶとともに、尊王攘夷思想の影響を受けます。23歳の頃、幕藩体制の矛盾に疑問を抱いて企てた挙兵計画が中止になると、郷里を出奔しました。その後、一橋家及び幕府に仕え、慶応3年(1867)パリ万国博覧会の使節団に随行して渡欧すると、ヨーロッパの進んだ社会制度・思想・文化などを目の当たりにし、大きな影響を受けました。

明治2年(1869)に明治政府へ仕官すると、日本の近代化に必要な制度の整備に尽力しました。明治6年(1873)に政府を退官し、第一国立銀行を設立すると、以降約500の会社設立・育成に関与し、日本を豊かにするために必要な様々な産業を興しました。また、約600の社会福祉公共事業や教育に関わるとともに、昭和6年(1931)に亡くなるまで、国際親善にも貢献しました。

埼玉県深谷市

実業家の出発点

栄一の生家では農業、養蚕のほかに藍玉を製造していました。藍の葉を買い入れて藍染の染料のもとを藍玉として売るので、父親の市郎右衛門は藍葉の鑑定に秀でていました。栄一も市郎右衛門の供をして仕入れや得意先まわりの経験を積み、14歳の時には、多忙の父に代わって一人で藍葉の買付けに出かけます。年若い栄一を最初は相手にしなかった農家の人たちも「この葉は肥料が足りないね。これは乾燥が不十分だ。」と的確に指摘する鑑識眼に驚き、栄一は上質な藍葉を仕入れることに成功しました。



渋沢栄一生地 旧渋沢邸「中の家」
(現存する主屋は明治28年(1895)栄一の妹夫婦により上棟)

倒幕から幕臣へ

江戸時代には、御用金と称して領主が富裕な領民にお金を供出させることがたびたび行われていました。栄一が17歳の頃、富農であった渋沢家にも岡部藩から500両の御用金が申し付けられました。代官所へ父親の代理で出頭した栄一は、自分は代理であるので帰って父親と相談の上で回答する旨を伝えますが、代官は即断を求め栄一を罵倒しました。役人の傲慢な態度に栄一は、「侍が威張るのは、幕政が悪いからだ。階級制度が間違っている。」と憤慨しました。このような体制への反発が、やがて栄一を「倒幕」へと駆り立てていくのでした。

文久3年(1863)23歳となった栄一は、隣村の知識人で10歳上の従兄の尾高惇忠やその弟の長七郎、従兄の渋沢喜作らとともに、高崎城を襲取り、横浜外国商館を焼き討ちするという計画を立てます。しかし、これは京都で政情を見聞した長七郎の反対により中止となり、栄一と喜作は幕府の嫌疑を避け、世の情勢を探るため、京都へ向かいました。元治元年(1864)、かねてから懇意だった一橋家の御用人平岡円四郎の勧めで一橋慶喜(後の第15代将軍徳川慶喜)に仕官すると、農兵の募集や新規事業の運営による財政の改革などに取り組み頭角をあらわしていきます。

ヨーロッパでの体験

慶応3年(1867)、栄一は、パリ万国博覧会に招待された将軍の名代として参加する徳川慶喜の弟徳川昭武の使節団に庶務・会計係として随行して渡欧しました。

好奇心旺盛な栄一は、チョンマゲを切り、洋装に変えて、議会・取引所・銀行・会社・工場・病院・上下水道などを視察しました。進んだヨーロッパ文明に驚くとともに、人間平等主義にも深い感銘を受けました。

約1年半の滞在で得た知識や体験が、栄一のその後の人生に大きな影響を与えたのです。



※洋装姿の栄一

※写真は「渋沢栄一伝記資料」別巻第10「渋沢栄一フォトグラフ」より

官界から実業界へ

明治元年(1868)に帰国した栄一は、徳川慶喜の謹慎する静岡へ行き合本(株式)組織の「商法会所」を設立し、地域振興に取り組みます。翌年には政府高官の大隈重信の説得によって租税正として明治政府に迎えられ、度量衡や暦法、鉄道、郵便、財政など様々な制度の企画・立案に当たりました。しかし、官界の硬直した体制に限界を感じるとともに、社会を豊かにするためには民間による産業の発展が欠かせないと考えた栄一は、明治6年(1873)に大蔵省を辞め、実業界へ転身し、第一国立銀行をはじめ約500社の企業の設立・育成に関与し、様々な産業を興すことに尽力しました。

栄一の生涯を通じての基本理念は「論語」の精神にあり、単なる利益追求ではなく、経済活動と「論語」に代表される道徳を一致させる「道徳経済合一説」という考えに基づき、公共の利益による日本経済の発展を目指しました。「近代日本経済の父」と称される栄一の偉大さはここにあるといえましょう。



※第一国立銀行

慈悲のこころ 社会福祉活動

栄一は社会福祉活動にも熱心でした。明治7年(1874)、東京府からの要請で身寄りのない子供や老人を介護するための施設「養育院」に関わり、以来91歳の天寿を全うするまで50年以上にわたり養育院の院長を務めました。また、「埼玉育児院」「滝野川学園」など児童福祉施設の設立・運営や「救護法」の制定などにも力を尽くしました。このような栄一の姿勢には、近隣の病弱な人へ着物や食事の世話までした慈悲深い母親の影響があったと言われています。

また、商法講習所(現一橋大学)の経営や、日本女子大学校(現日本女子大学)の創立委員(のちに校長)など、教育にも力を入れました。

栄一は医療施設の整備にも情熱を注ぎ、東京慈恵医院(現東京慈恵会)、恩賜財団済生会、聖路加国際病院、日本結核予防協会などの設立や運営にも関わりました。



※養育院巣鴨分院を訪問された高松宮殿下とともに

国際親善にも尽力

日米関係の悪化に心を痛めていた栄一に、アメリカ人シドニー・ギューリックから、人形による国際交流を行い、日米友好を進めたいという提案がありました。栄一は日本政府へ協力を働きかけるとともに「日本国際児童親善会」を組織し、昭和2年(1927)にアメリカ側から約13,000体の「青い目の人形」を受入れました。この人形は全国各地の小学校に届けられ、大歓迎を受けました。そして、答礼として58体の日本人形がアメリカへ贈られました。現在「青い目の人形」は埼玉県内の小学校などに12体(全国で300体以上)が保存されています。

また、栄一は第18代アメリカ大統領グラント、エジソン、救世軍ウィリアム・ブース、中国の孫文、インドの詩人タゴールなど、世界の著名人とも親交がありました。



※青い目の人形を抱く栄一

栄一と富岡製糸場

殖産興業を進める明治政府は、明治3年(1870)、貿易による外貨獲得のため、模範的な洋式製糸工場の建設を計画しました。設置主任となった栄一らの主導のもと、尾高惇忠が現場責任者となり現在の群馬県富岡市に建設が進められ、明治5年(1872)に富岡製糸場が開業し、惇忠は初代場長となりました。平成26年(2014)「富岡製糸場と絹産業遺産群」は世界文化遺産に登録されました。



錦絵 上州富岡製糸場之図(富岡市立美術館・福沢一郎記念美術館所蔵)

雅号「青淵」の由来

書が趣味でもあった栄一はたくさんの書を残していますが、その署名には「青淵」の雅号が用いられています。これは、栄一の生まれた「中の家」の近くに「上の淵」と呼ばれる青々と水をたたえた淵があったことにちなみ、尾高惇忠により命名されました。

栄一と煉瓦と深谷市

栄一は明治20年(1887)に日本煉瓦製造会社を設立し、翌年に現在の深谷市上敷免に工場をつくります。ここで製造されたレンガは、日本銀行・司法省(現法務省日本館赤レンガ棟)・東京駅など日本の近代化を象徴する建築に使用されました。市内のJR深谷駅舎は、これを縁として東京駅を模したデザインとなっています。栄一の喜寿を祝って建てられた誠之堂(国重要文化財)にも日本煉瓦製のレンガが使われています。



深谷駅

誠之堂

煮ぼうとう

深谷の郷土料理「煮ぼうとう」は、平打ちの麺にネギや大根、にんじんなどの野菜がたっぷり入った、しょうゆ味の麺料理です。栄一も帰郷の際には好んで食べました。

文化庁が定める「100年フード」に2023年に認定されました。

